

神宿る地に生きる

和田
れん

灼けるような日差しを頭上に受けて、足往は川べりを歩いていった。

海辺のムラを出て、大河沿いに歩きつづけ三日が経つ。目指すムラはこの先だと教えられた、大河から分かれる清流を遡りはじめたのは、今朝のこと。夏の照りつける陽射しは、若い足往の体力を容赦なく奪っていた。周りを見渡しながらかう行く余裕などとうになく、足元の砂利を踏みしめながら一歩ずつ進むのがやつとだった。

水音に視線をあげると、銀色の身体をくねらせて、魚が川面に躍っていた。

「鮎か」

昨日立ち寄ったムラを出てから何も口にしていない足往は、魚を捉えようと川へ足を踏み入れた。背に負ってきた皮袋を岸辺に放り、ゆつくり歩を進めていく。さらさらと流れる水は清く、冷たい。ひざ下までのその流れは、川底の石に生える苔をやさしく揺らしていた。魚影が、足の間を潜り抜けていく。鮎は淡い碧銀の腹をみせては、まるで足往をからかうようにするりと身かわし、そして泳ぎ去りはしないのだった。

その滑らかな鱗に指先が触れ、両の手で包み込もうと前のめりになった足往は、苔に足をすべらせ流れに倒れこんだ。

「なにをやってるんだ、オレは」

ひとりごちながら身体を返し、川床に足を投げ出した足往は、青く突き抜けた空を見あげる。

冷たい水に身体の火照りが溶けていき、背中を一涼の風が吹きすぎていく。その風に乗って聞こえてきた女の忍び笑いに、足往は右岸を振りかえった。

水汲みにきたのだろう、襖を抱えた女がひとり、口もとを手でおおって俯いている。その肩がちいさく揺れていることに気づいて、足往は立ちあがった。

「笑ってくれるな。腹が減って力が出ないだけだ」

ざぶざぶと流れを横切って近づくと足往を、女はまぶしそうに見つめている。濡れたような黒い瞳の若い娘だった。大きく息を吸いこんだ形の良い唇から、言の葉が紡がれる。

「このあたりでは見ない顔だけれど、おまえはどこから来たの？」

不思議な響きの声だった。年若い娘にしては低く、それでいて耳に心地よいやわらかな音に、足往は聞き惚れていた。娘の不審げな眼差しに気づき、「海の近くから」と足往はあわてて応える。

「海……」

娘はつぶやいたきり、首をかしげて何かを考え込んでいたが、

「腹が減っているのなら、私についておいで」

そう言うのと立ち上がり、襖を抱え川に背を向けて歩きだした。

「襖はオレが持とう」

足往の言葉に娘が歩みを止める。岸边に放つたままの皮袋を取りに戻つた足往は、娘のそばへ駆け寄ると、甕を抱いた娘の胸元に手を伸ばす。水を湛たたえた甕は思いのほか重く、取り落しそうになつた足往の手が、胸のやわらかなふくらみに触れた。娘は身体を震わせ、顔を背ける。

「すまない、わざとじゃない」

詫びる足往に小さくうなずいた娘の白い首筋から頬が、ハシバミの実の汁を刷はいたように紅く染まつていく。この娘が欲しい。足往は身のうちが熱くなるのを感じていた。

娘の歩みの先には、小高い丘が見える。川へ向けて張り出した丘の先端は、層をなす赤土と黒土がむき出しの崖になつている。飛び降りたら命はなさそうなその高台からは、いく筋もの煙があがつていた。

娘は丘の左手のゆるやかな斜面を上がつていく。その背に向けて、足往は問いかける。

「おまえの名を教えてくれないか。オレの名は足往あゆき。足の立つ限りどこまでも歩いて往ゆける者の意」

足往の声が聞こえないのか、娘は振り向きもせず無言のまま前に行く。その後ろ姿が、女にしてはとても上背があることに気づいた足往は、まじまじと娘の身体を眺めた。すっきりした

上半身に、くびれた腰。そこから曲線を描く尻の肉づきは、さきほど触れた胸元の豊かさを思
い込ませる。貫頭衣かんとういの裾からのぞく長く白い脚は、若鹿のような細さと強靱さを見せている。

この娘を手にいれて、子を産ませたい。それにはまず、娘に名を告のらせねばならない。兄た
ちから教えられた掟おきてに倣ならい、足往はなんとか娘から名を聞きだそうと焦っていた。

「なあ、おまえの名を聞かせてくれ。頼む」

足を速めて娘の隣に並び、その横顔にふたたび声をかける。高く結い上げた娘の黒髪からこ
ぼれた一掴みつかの毛束が、額から耳にかかっている。ふつくらしした白い頬につややかな黒髪が映
えて、艶めかしかった。もう一度声を聴かせてくれ、そう告げる足往から逃げるように、娘は
小走りでなだらかな坂を上がついてしまった。甕の水がこぼれぬように、足往も必死であ
とを追う。

坂を上がりきったそこは、拓ひらけていた。森を背にした家々が、広場を囲むように建てられて
いる。そのうちの南に面した家の中へ、娘は走り込んでしまった。

「置いていくなよ……」

その背中を追うこともできず、足往は甕をおろしながら辺りを見回す。地面に丸く穴を掘り、
その中に丸木を組み、萱かやで葺ふいた屋根をいたたく家のかたちは見慣れたものだった。それぞれ
の屋根の煙出しの穴から、煙があがっている。風に漂う肉の焼ける香ばしい匂いが鼻をくすぐ

る。人影がないのは、みな、家々に寄り添って食事をしているからに違いなかった。

「ああ、腹が減った……」

つぶやいて、甕を抱えるように足往はしゃがみこむ。空腹は、いよいよ立っている力さえも奪っていた。膝の間に挟んだ甕の縁に額をもたせかけ、眼をとじた足往の耳に、さきほどの娘の声が聞こえてきた。

「おば様、あそこに座っている若者です」

顔をあげると、正面の家の戸口から、娘に手を引かれた老婆が出てくるところだった。木の杖をついてはいるが、しっかりと足取りで、老婆は娘とともにこちらへ向かってくる。

「どこから来た」

皺んだサルナシのような顔をした小さな老婆は、足往のそばまで来ると、しわがれた声で問うてきた。

「海辺のムラから」

老婆を見あげて足往が応えた途端、

「嘘をつくな！」

一喝とともに、足往の肩にピシリと杖が当てられた。

「海の者ならば、頬ほほに刺青いれずみを入れてあるはずじゃ」

老婆の杖先は、足往の頬をぐいぐい突いてくる。

「嘘じゃない。オレは刺青の儀の前にムラを出たんだ。証拠あかしならここに」

足往は背の皮袋から、貝の腕輪と塩の入った大きな袋を取り出して老婆へ渡す。さらに、袋の二重にした底から取り出した大切な道具たちを、両手に掲げてみせた。

「オレは、土部つちべの者だ。これはオレが使う土捏ねつちねの道具」

あらためて人にそう告げるのは初めてのことだったが、足往は誇り高くそれを言えた自分に満足していた。

土部。

土と砂と水を捏ねあわせ、器や依代よしろの形に整えた後、火にくべて焼き締める。適した土を探すことから始まり、複雑な形と紋様を刻む術すべ、さらには風にさらし火に入れる時期の見極めと、火の加減。それらは土部と呼ばれる一族が、代々受け継いできた技だった。その土部の者である父や兄たちが、旅立つ自分へと分け与えてくれた、土器へ紋様づけをするための道具たち。

貝や、縄を巻いた竹や、編布あんどんの小切れ。旅のあいだ使うことのなかった手の中のを、足往は懐かしく眺めていた。

「なんと、土部とな」

そうつぶやいたとき、老婆はシワのなかに埋まった小さな瞳を見開いて、足往の全身を眺め

まわしている。その射るような視線に耐えられず、足往は老婆から眼を逸らし、かたわらに立つ娘に眼差しで助けを求める。娘はしかし、眼が合った瞬間、顔を背けてしまう。娘がオレを見てくれない。そのことに足往は、これまで感じたことのない、胸がひきつれるような痛みを味わっていた。

「つづきは腹を満たしてから聞かせてもらおう。我が家へ来るがいい」

老婆は足往の取り出した貝の腕輪と塩の袋を持ったまま身を返すと、広場を突つ切り家へ戻っていく。あわてて土捏ねの道具を皮袋にしまい、甕を持ち上げようとする足往の腕を、娘の手がそつと制した。ひんやりした細い指先と、桜貝のような爪が美しかった。見惚れている足往に、「甕はいいから、はやく行つて」と顔を伏せたまま娘が囁く。その白いうなじに、足往はもう一度、すぎるようにたずねた。

「頼む。おまえの名を、教えてくれ」

「火魚かな。水だけでなく、火の中さえも思いのままに泳ぎわたる魚、の意」

一息に告げた娘は甕を取りあげ、小走りで老婆に追いつくと、共に戸口に消えていった。

足往は大きく息を吐きながら天を仰ぐ。

「火魚かな、か」

娘の名をつぶやいただけで、身体のうちが力みなぎってくるようだった。笑みにゆるむ頬

を両手で叩いて立ちあがると、足往は広場を駆け抜けていった。

招き入れられた家の内は、煙出しの穴から光が射し込み、隅まで見渡すことができた。土の床は、地表から大人の腰ほどの深さまで掘り下げられている。海辺のムラにくらべて床面を土中深くしているせいも、足裏に感じる土も屋内の空気もひんやりとして心地よい。

床の中央に切られた大きな囲炉裏では、串に貫かれた数尾の鮎あぶが焙あぶられている。火の端に据えられた鍋のなかでは、獣の肉が、芋やエゴマの葉などとともに煮込まれ、その脇では土板の上に乗せられた餅が、こんがり焼き目をつけていた。

「さあ、そこに座って好きなだけ食べるといい」

鹿皮の敷物を示され、足往はそこに胡坐あぐらをかいた。正面に座った老婆は、しわくちゃの顔を半分に縮めたり延ばしたりしながら何かを咀嚼そじやくしている。老婆の隣では、火魚が囲炉裏の中の焚たき木をつぎ足していた。

足往は、火魚の差し込んだ鮎の串にかぶりつく。海の魚とは違う、新芽が香るような味わいが口のなかに広がる。

「この鮎は、美味うまい」

足往の育った海辺のムラでは、鮎といえど干されたものばかりだった。香氣立つ新鮮な白い

身は極上の味わいで、たちまち三尾をたいらげてしまった。

「オグニの清い流れで育った鮎は、その辺の川で獲れるものとは違うからのう」

満足げな笑みを浮かべる老婆の言葉に、足往は己が目指すムラにたどり着いていたことによく気づいたのだった。そして、目の前の老婆の両腕には、祀部まつりべの者であることを示す赤と黒の刺青が刻まれていた。

「あなたは——。もしかして、オグニの間キこえ様サマなのか？」

次の瞬間、囲炉裏の向こうから足往の額へ杖が伸びていた。

「あんたじゃないわい、おぼば様と呼べ」

額を軽く小突いた杖を引つ込めながら、老婆はじろりと足往をにらみすえる。すまない、と頭をさげた足往は、

「おぼば様。いや、オグニの間こえ様。オレは、あなたに会うためにここまで来たんだ」と居いずまいを正した。

足往の生まれたムラでは、男は一人前の年頃になると頬いれずみに刺青を入れる習慣ならわしだった。刺青を入れた男は妻を迎え、ムラに新たに家をつくり、共住みをはじめ。ところが、兄たちが次々と妻を迎え、足往が刺青を入れる年が来たとき、ちょうどよい年頃の娘がムラには残っていない。女が足りなくなつたムラは、ほかの集落から女をさらつてこなければならぬ決まり

だった。

「だけどオレは、他所よその娘を奪よつてきてまであのムラに暮らしたくはなかった」

足往は、膝のうえに両の拳こぶしを握にぎつてつづけた。

「オレは土部の一族に生まれたけれど、己のぞむものを焼かせてもらえなくて」

土部はもともと、材となる質のよい土が採れる地に暮らすため、どここのムラにでもいるわけではない。足往が生まれたころには、近隣の集落には土部の跡継ぎがいなくなり、足往の一族だけがその技を細々と伝えていた。よい土で堅く焼き締めた器は長持ちするため、煮炊きの鍋や水を張る甕は、遠方のムラからも人が訪れ、それらを求めていく。黙々と、鍋や甕を焼きつづける父や兄たちの傍かたわら、足往は、小さな依代をつくるのが好きだった。人型に似せられた依代は、呪まじないの儀式で使われる。多くは産の女の身代わりとして、出産の枕辺に置かれ、子を生ま落す瞬間に叩き割られてしまうものだったが、おなじような形の鍋や甕より、ずっと面白く形づくれるものだった。しかし、そもそも呪いの儀式を執り行う祀部の者たちが、海辺のムラの近隣には少なかつた。それも土部とおなじように年々跡を継げる者がいなくなり、依代がほしいという依頼は、この数年ほとんど来なかつたと言つていい。頼まれもしない依代を、勝手に焼くことは許されない。足往は、己のぞむ形を封じ、父や兄とともに鍋や甕づくりに励むしかなかつたのだつた。

「そんなときに、オグニの聞こえ様の噂を聞いたんだ」

足往は身を乗りだしてそう言うのと、鹿皮から尻をずらし土の上に身体を丸めた。

「オグニの聞こえ様は、呪いをよくなさると聞いています。この一帯のムラの者たちの病も、産も、その力でよく癒している。どうかオレをこのムラに置いて、オレがつくる依代を、その呪いに使ってください」

額を土にすりつけて懇願する足往をじつと眺めていた老婆は、傍らの火魚に視線を移した。

「火魚よ。おまえはいずれ、わしの跡を継ぎ、聞こえの者として祀りまつをせねばならん。これはおまえにもかかわること。どうしたものかのう」

しばらくうつむいていた火魚は、顔をあげるとはつきりした声で応えた。

「おば様様の呪いには、木彫りの依代を使うのが習慣。土でつくった依代がどんなものかを見てから決めたいと思います」

「ふむ、それもそうじゃな。そういうわけで、そなた」

ああ、まだ名を告のらせてなかつたのう、そなたの名は？ と老婆に問われた足往は、火魚に

告げたと同じように胸を張り、名乗りをあげた。

「足往あゆき。足の立つ限りどこまでも歩いて往ゆける者、の意」

「どこまでも我が足で往くか。よい名じゃ。そうじゃ足往、依代のついでに鍋と甕もつくって

くれるか。そろそろ我が家の鍋にもひびが入ってきておるでの」

夕ダで鍋裏が手に入るとは、ついておる。そう言つて高らかに笑う老婆に深々と頭をさげる足往を、火魚は囲炉裏の向こうからじつと見守つていた。

「さて、みなの子。この若者の名は足往という。わしの祀りに用いる依代をつくる土部として、このオグニに住じゅうしたいと申しておる」

広場に集まつた人々を前に、聞こえ様の朗々とした声が響きわたる。その隣で、腹を充分に満たされた足往が地に片膝をつき、頭を垂れている。照りつける昼下がりの夏の日差しが、膝先に短い影を落としていた。

「土部と言えば、陸行三日もかかる海辺のムラの一族ではないか」

「土部でありながらここまで流れてくるとは、在所とがでなにか咎とがを負つて逃げてきたのではないのか」

好意的には聞こえない囁きが交わされるのを、足往は黙つて聞いていた。みな言うのも無理はない。土部は祀部とともに、その土地に根付き、特別な技を継承していく。跡継ぎとなる子を生なすために、他の集落の血を受け容れることはあつても、一族の者がムラを出ていくことはありえなかつた。「依代をつくる土部」として生きるためムラを出ると言う足往を、父も兄

も口々に諫めた。けれど、足往の決意は揺るがなかった。結局は足往の意志を認め、土捏ねの道具を錢に送り出してくれた父たちの顔が脳裏に浮かぶ。だからこそ、誇り高い土部である自分が、咎人と疑われることは片腹痛い。土の上に揺らめく人々の黒い影を見つめながら、どう言葉を返したのかと思案する足往の頭髮が、ぐいと強い力で掴まれる。

天を仰ぐ形になった足往の顔を、聞こえ様が見おろしていた。おそろしく鋭いその視線を、足往は口を引き結び、力強く見返す。老婆の皺んだ口もとに、にやりと笑みが浮かんだ。

「この者の顔をしかと見よ」

今度は足往の面を人々へ向けながら、聞こえ様は言い放つ。「顔立ちの整うた、なかなか佳い男だと思わぬか」広場の者たちを見渡すと、老婆は足往の前髪をかきあげ、凜々しい眉をのせた額を陽光にさらす。

「よく見よ。この涼やかな額に咎負いを示す刺青は、刻まれておらぬ。なによりこの足往、わしの役に立ちたいがためにオグニを目指してきたのじゃ」

足往の頭の上に骨ばった手を置いたまま、老婆は言った。

「まずはこの者が、真実わしの役に立つか否か、土部としての働きを見極める。依代が焼きあがるまで、足往は客人として我が家に留まらせることとする。この聞こえの申すこと、従えぬ者は地を踏み鳴らしてみよ」

挑みかかるような、しわがれた太い声が広場の空気を圧した。その場に立っていた男も女も、そして幼い子供までもが、雷に打たれたように次々と地に膝を折り、平伏していく。「オグニの聞こえ様」の威厳に触れた足往は、この祀部の長老が呪いを行う様を、はやく見てみたいと思うのだった。

人々に足往の面倒をみるよう言い渡すと、聞こえ様は家へ戻っていった。その小さな背中が戸口の中に消えた。とたん、ムラの者たちは人垣を狭め、足往に近寄ってきた。

「年若いおまえが、本当に依代をつくれるのか」

「甕はどうだ。大振りのものが一つ欲しい」

次々と声をかけられ、足往は戸惑っていた。代々一族の者に技を伝えてきた土部として、その工程を人に見せることは憚られる。とはいえ、たつたひとりで出来ることには限りもあった。ゆっくり立ちあがり、手足についた土をはらいながら、足往は「どうしたものか」と考えあぐねていた。

「足往」

背後から低い声で名を呼ばれ、身のうちの血汐が一瞬で沸きたつ。振り返ると、火魚が竹を編んだ籠と甕を抱えて立っていた。

「土を採りにいかねばならぬのでしよう。材に適した土がオグニにあるかどうかわからぬけれど」

「土なら、心当たりがある」

火魚から糞を受け取りながら、足往は応えた。広場の北、切り立った崖になっている方角を指し、

「あの崖下に、赤土と黒土の層がむき出しになっていた。あれはおそらくよい材となる。そしてオグニの清い流れの川床の砂。それを混ぜれば、よい捏ね土こつちになるはずだ」

力強く語る足往に、人々がほうと声をあげる。

「もしも手が空いている者がいたら、土と砂、そして水を運ぶのを手伝ってもらえないか」

足往の言葉に、女と子供たちが「土を入れる籠と糞を持ってこよう」と、家に向かって走ります。ほかに用意するものはとの問いに、土を捏ねるための台となる板、野焼きのための薪まきも欲しいと足往が応えると、「ではクリの大木を伐きってきてやろう」と、壮年の男たちは腰にさげた石斧いしおのを手に、森へ入っていった。

その背中を見送りながら、足往はかたわらの火魚に囁いた。

「おまえのおかげで、ムラの人々が力を貸してくれる」

ありがとう火魚、と耳元で名を呼ばれ、みるみる頬を朱に染めた娘は、

「足往はおば様様の大切な客人。当然のことをしたまで」

消え入りそうな声で言う、くるりと足往に背を向けた。そのすこし傾げた細いうなじに唇を落とした。細い腰を折れるほどに強く抱きよせたいと、足往は湧きあがる身内の熱を持って余す。

「依代がおば様に認めてもらえたら、おまえに妻つま問まいしたい。オレの子を産んでくれ、火魚」

首筋にかかる男の熱い吐息に、娘の身体がびくりと震える。その細い肩が、大きく上下していた。やがて、ゆつくり足往に向き直った火魚の顔は、青ざめていた。

「足往。私は誰とも婚姻めあうことはない。子も産むこともない」

腹の底が冷えるような、抑揚のない声で告げると、火魚は「おば様の手伝いをして」と足往を残し、走り去ったのだった。

崖下に層をなす赤と黒の土は、足往が思ったとおり、強い粘りをもっていた。足往は、ムラの女たちとともに、石を欠いてつくったヘラで崖の壁面から土をこそぎ取り、籠へ盛っていく。清流の川床に沈む、きめ細かで鈍い輝きを帯びた砂は、子供らに水遊びがてら掬すくってもらった。甕に水を汲み終えるころには、女も子供も、足往の周りで楽しげに笑いあうまでになっていた。

「ねえ、足往。この土と砂、次はどうするの」

襖を抱えて集落へ向かう坂を上る足往に、隣を歩く子供がたずねてきた。

「土と砂と水を混ぜて、よく捏ねあわせる。捏ね土ができれば、形をつくっていく」

「捏ねるの、やってみよう」

一人が叫ぶと、周りにいる子供たちが次々「われもやる」と叫びだす。

「捏ねるには、平らな台がなければダメなんだ。男衆がさつき木を伐りに出かけたばかりだから、今日は台になる板はまだ出来まいよ。それに——」

ここから先はオレ一人でやると言いかけた足往を、子の手を引いた年かさの女がさえぎった。「オグニの男たちは、腕がいいよ。きつともう、とつくに木を伐り倒して板にしているはずさ」

なかでもウチの夫の腕は最高だよ、と妻鹿という名の女は大きな身体を揺すって笑い、さつさと坂を上がつていく。足往もあわてて後につづいた。

妻鹿が言ったとおり、広場の中央には、肩幅の広さに切り出され、粗いながらも表面を平らに整えられた板が据えられていた。

「こんな厚みでよかつたか、足往よ」

男たちの輪のなかから歩み出た千熊と名乗る壮年の男が、石斧の柄で手首ほどの厚みの板を指し示す。

「すごい。これほどの大きさの木を伐り倒して、もう板にしてしまおうとは」

板を抱きかかえて感心する足往の背を、「だから言つたろう、うちのは腕がいいつてさ」と小突きながら、妻鹿が目くばせする。「父ちゃんはずいんだぞ、足往」と、妻鹿の腰にまわりついている子供たちも自慢げだ。野焼きに使う薪も、ムラの年寄りから子供までが一緒になって伐つては運び、広場の隅に次々と山積みになされていく。足往の胸に、海辺のムラの父や母、兄たちの面影が浮かんだ。

すこしの間、まぶたをとしていた足往は、眼を開けると板を地に据え、その脇に座つて男を見あげた。

「千熊、礼を言う。かわりにと言つては何だが、オレはオレが知る限りの土部の技を、このムラの者たちに伝えたいと思う。受けてくれるか」

一族でない者に技を伝える。それは二度と一族のもとへ戻れぬことを意味していた。

依代をつくる土部として生きたいとムラを飛び出した足往だったが、技は己の胸だけに秘めておくつもりでいた。ほかの土地での暮らしが立たぬときは、故郷の一族のもとへ帰れるように。だが、足往は決めたのだった。海辺のムラには戻らない。このオグニで、火魚とともに生きていきたい。このムラの人々に認めてもらえよう尽くしたい。

千熊が息を呑んだのがわかった。狼狽ろうばいしたように、千熊は周りに立つ男たちとせわしなく視

線を交わす。やがて男たちは大きくうなずき合つたかと思うと、次々に膝を折り地に額をつけていく。千熊が太い声を絞りだして言った。

「足往、よろしく頼む。土部でない者に技を伝えることがどれほど重たいことか、俺たちは知つている。それを為そうと言うおまえを、俺たちはよろこんで迎えよう」

今度は足往があわてる番だつた。

「顔をあげてくれ、千熊もみなも。オレはまだ年若だ。そのようにされては困つてしまう」

千熊のもとへ駆け寄り、その肩を揺さぶる足往を、男たちが取り囲む。

「おまえは土部だ。祀部である聞こえ様とおなじく敬わねばならない。火魚もまた年若だが、祀部を継ぐ者として俺たちはあの娘を敬つている」

男の口から愛しい娘の名が語られ、足往はさきほどの火魚の言葉を思い出していた。

誰とも婚姻めあわぬ。子も産まぬ――。

女は男に妻問いされ、子をな生すもの。そう信じている足往にとつて、そのいづれをも拒む火魚の言葉は理解できなかつた。誰か心に決めた相手がいるのではないか。その男に妻問いされるまで、誰の求愛も受けぬということか。気になり始めるともう抑えられなかつた。

「火魚には……決まつた相手がいるのか」

切羽詰まつた顔で切りだした足往の言葉に、広場に集つていた者たちは一瞬、呆氣にとられ、

次に弾けたように笑いだした。

「おやおや、もう火魚に目をつけたのか」

「火魚はオグ二で一番美しい娘だものねえ」

「足往もいい男だし、似合いいえば似合いだな」

問いには答えず、口々に好きなことを言い合っている様子に、足往は「どうなんだ、教えてくれ」と声を荒げた。

「それは、おまえがああ娘から聞きだすことだろうが」

足往の肩を、日に灼けた逞しい腕で抱え込みながら、千熊が子を諭すように囁く。「ただし、火魚は手ごわいから覚悟したほうがいいぞ」とつづいた言葉に、周りの男たちがどつと笑った。

「このムラの年頃の男たちはみな、火魚に妻問いして断られているからな」

せいぜいがんばれよ、と最後は同情の眼差しを向けられた足往は、顔を赤くして俯いてしまった。どうやらこのムラに火魚の慕う男はいないらしい。そのことにひとまず胸を撫でおろした足往だった。

それからさんざん皆にからかわれながら、足往は土と砂と水を合わせて土捏ねを終わらせた。人の頭ほどの大きさに丸めた塊を、いくつもの甕に入れ、上を濡らした編布で覆ったところには、夕陽が遠く山並みへ沈みかけていた。

明日はいよいよ形をつくつていくと足往に告げられた子供たちが、歓声をあげながら散っていく。家々では夕餉ゆうげの支度が始まつているらしく、煮炊きの匂いが辺りに満ちていく。たとえ自分のためでなくとも、火魚の用意した夕餉が食べられる。いまはそれで十分だと言ひ聞かせ、足往は愛しい娘が暮らす家へと向かつた。

「おお、足往。みなとうまくやれている様子、千熊から聞いたぞ」

戸口をくぐるなり、待ち構えていたおば様おばさまが声をかけてきた。返事もそこそこに、足往は火魚の姿を確かめる。囲炉裏端で湯気の立つ鍋をかき混ぜている火魚を認めて、足往の顔がほころぶ。炎のゆらめきが、火魚の彫りの深い顔立ちに陰影をつけている。あらためてその美しい横顔に足往は見惚れるのだつた。「これ足往、聞いておるのか」と、おば様に杖で脛すねを叩かれた足往は腰をおろし、ようやくおば様に向き直る。

「ムラのみなのおかげで、ずいぶん早く捏ね土が出来上がった」

鍋を見つめたまま顔をあげようとしなひ火魚の姿に、足往は「火魚のおかげで」という言葉を呑みこんだ。

では明日にはお前の作った依代が見られるかのう、と老婆が足往の顔をのぞき込む。

「形はできるが、焼く前の依代と、焼き締めたものとは、ずいぶん風合いが違うのだ、おば様」

足往の言葉を、風合いなどどうでもよいわ、とおば様は切り捨てる。「おまえが何を込めてつくったかは、形を見ればわかる」とつづけると、何を込めてとは？ と問い返した足往には返事もせず、老婆は火魚の差しだした器の汁をすすりはじめた。夕餉の間は、誰も口を開かなかった。鍋の煮える音と焚き木の爆ぜる音しか聞こえない中で食事が終わると、老婆は囲炉裏の向こうに敷かれた熊皮に横たわり、すぐに寝息を立てはじめた。

火魚はこの夜、一度も足往に視線を合わせなかった。足往も火魚に声をかけることが憚られ、与えられた鹿皮のうえに横になった。さすがに疲れがでたのか、足往はすぐに夢路へと落ちていった。

「ねえねえ、足往。できたよ」

「われもできた。どう？ うまいでしょう？」

翌朝のムラの広場は、子供たちの楽しげな声であふれていた。大人たちに混じって子供たちが次々に差しだす、細長く伸ばした捏ね土。足往はそれを、円く広げた捏ね土の縁に積み重ねていく。ある程度の高さまで積みあがると、ひも状の捏ね土が積みあげられた側面を、指先で器用にならし平らにしていく。見る見るうちに、大きな鍋の形が出来上がる。続いて、同じようにひも状にした捏ね土を積みあげながら、今度は上部をすこし狭めていくと、甕の形が完成

した。大小さまざまな形の甕や鍋ができあがっていく様を、広場に集ったムラの者たちは、感嘆の声をあげながら見つめていた。形が成った土器の表面が乾いてきた頃を見計らって、足往は、皮袋から土捏ねの道具を取り出した。貝殻、縄を巻いた竹、編布の切れ端。それらを子供たちに手渡しながら、

「いいか、器の内側に手のひらを添えて、外側にそっと紋様を刻んでいくんだぞ」

足往は指に挟んだ貝殻で、甕の表面に筋をつけていく。貝の持つたくさんの溝が、足往の手の動きに合わせて微妙な揺らぎを伴いながら、土器に美しい紋様を刻んでいく。甕の口の周りに波打つ紋様を刻み終えると、今度は編布の小切れを手にとり、そっと紋様の下部に押しつけていく。粗い布目が、小さな格子状の模様をつけていく様に、子供たちは興奮を隠せない。

「わー、すごいよ足往」

「われもやるー」

子供たちが模様づけに挑戦するのを、足往が手をとりながら教えていく。大人たちも見よう見まねで道具を手に、甕にさまざまな紋様を刻んでいく。人垣の中に混じり、食い入るよう足往を見つめている火魚の姿を認めた千熊が、

「なあ、火魚よ。足往はなかなか頼もしい男だと思わんか？」

その顔をのぞき込むように声をかける。驚いて千熊を見あげた火魚の頬が紅い。おっ？ と

からかうような声音をあげた千熊に、火魚は唇を噛みしめる。

「おば様の役に立つ男かどうか、まだわからぬ」

そう言い捨てて、火魚は身を翻し駆け去ってしまった。「あんな眼で足往を見ていたくせに、まったく女つてのは素直じゃねえなあ」おおげさに唸^{うな}り声をもらす千熊を、横から妻鹿が小突いてくる。「ご覧よ、足往だって」広場の中央に目をやれば、駆けていく火魚の後ろ姿を見送る足往が、深いため息をついていた。

日が傾くころには、紋様が刻まれた鍋や甕が広場の隅にずらりと並べられていた。東の空に姿を見せた白く円い月を見あげて、足往はみなに告げた。

「あの月が細り天から姿を消したころ、野焼きをする。それまでここで器を乾かすから、倒して割ったりせぬよう気をつけてくれ」

もう使えそうなのに、と自分で紋様を刻んだ甕を持ち帰ろうとする子供の頭を撫でながら、「焼くことで器は丈夫になり、水を淹^いれても漏れぬようになる」と足往は言い含め、甕を置いていくように諭した。人々が家に戻っていくのを見送った足往は、取り分けておいた捏ね土の塊を手におおば様の家へ向かった。

「足往、何をしておる」

夕餉のあと、膝のうえで土塊をちぎっては丸めはじめた足往に、おおば様がたずねる。

「依代をつくっている」

数年ぶりに形づくる依代だったが、手順を忘れてはいなかった。手のひらに乗るほどの大きさで頭、胴、手足がついた人形を成した後、二つの乳房、腹には親指の先ほどの土塊を継ぎ足し、ふつくらと孕んだ女の姿に似せていく。顔には、木の枝の先で細かく目鼻を刻み、さらに腕には聞こえ様とおなじ祀部を示す刺青の紋様も施した。

「どうだ、おば様」

「ふーん」

ちろりと視線を投げかけただけで、老婆は依代を手に取ろうともしなかった。

「よく見てくれ、おば様。足には衣の襷もあるんだぞ」

足往はたまらず依代を掴んで差したが、老婆は見向きもしない。これを認めてもらって、もう一度火魚と話がしたい。焦った足往は、「おば様、頼む」と情けない声をあげる。

「これ、火魚。そこにある白膠木の木をこつちに寄越せ」

足往の泣き言を完全に無視した老婆は、黒光りする石刃を懐から取りだすと、火魚の差し出した木片を削りはじめた。木くずが囲炉裏に落ちるたびに、芳香が漂う。しばらくして、おば様の手のうちには不思議なモノが削りあがっていた。

「これは……?」

老婆から手渡されたそれは、女の手首ほどの太さで、ひじほどの長さのモノだった。上部と中ほどに縊れがあること、真ん中の部分には乳とおぼしき二つの突起、その下部にこんもりとしたふくらみが彫りだされていることで、孕んだ女の形を模しているらしいことは分かった。しかし、顔にあたる上部は木の皮を削りとっただけで、つるりと平らなままだった。

「それがわしの呪いに用いる依代じゃ。お前のつくる依代と何が違うか分かるか」
老婆が足往の依代を指さして問う。「顔がない」と足往は即答した。

「おろかも。顔のあるなしではなく、わしが尋ねておるのは、依代をつくる心のことよ」
骨ばった手が、足往の頭をぱしりとほたいた。つくる心。どういう意味なのか、足往は測りかねて首をかしげる。

「火魚、おまえには分かるか」

囲炉裏の向こうで、火魚が立てていた膝を戻し、背筋を伸ばした。

「何を形づくろうとしたか、ということでしょうか」

「そのとおり、さすがはわが血を引くだけはある」

火魚の言葉より、老婆の言葉の意味に、足往は思わず声をあげていた。

「火魚はおば様のか——娘？ いや、孫なのか」

ひとつ家に共住みしていることから、血縁であろうとは思っていたが、まさか直系だったと

は。口を大きく開けたまま固まっている足往に、老婆はこともなげに返した。

「火魚は我が孫じゃ。わしによく似ておろうが」

重々しくうなずくおば様は、「いやいやいや」と足往は大きく手を振る。まさかこの干からびたサルナシの实のような老婆と、ハシバミの实の紅が似合う美しい娘とが似ているなどは、口が裂けても言えるはずがない。奥歯を噛みしめて、足往は必死で首を振る。

「なんじゃ、その顔は。わしとて生まれた時から皺だらけの婆だったわけではないわ。若いころはオグ二一の美女と呼ばれて……これ足往、聞いておるのか」

胡散臭げな視線をよこす足往の頬を、老婆が両手で思い切りつねりあげる。いててと叫びながら、かすかなしのび笑いのする方へ目をやると、囲炉裏端でうつむく火魚の肩が小さく揺れていた。火魚が、笑っている。ほんの二日前に聞いたその笑い声が、足往には懐かしく愛おしくてならなかった。そうだ、おば様様に火魚を妻に迎えたいと頼んでみようか。足往の頭に、そんな思いが浮かんたときだった。

「聞こえ様！ オグ二の聞こえ様はおられるか！」

戸口から、見慣れぬ男が顔をのぞかせていた。オグ二のムラの者とは違い、衣に大きな格子模様が縫い取りされている。老婆は立ちあがると、男を家内に招き入れた。

「そなたは山野辺のムラの。さては娘が産気づいたか」

聞こえ様の足元に跪ひざまずいた老年の男は、頭を激しく振ってうなずいた。

「よし、すぐさまわしも山野辺へ向かう。そなたは先に戻っているがよい」

男は一つ頭をさげると、無言で家を飛びだしていった。「おば様、これを」いつの間に出してきたのか、きれいに畳まれた衣を火魚が捧げ持っていた。うむ、と応えた老婆は、おもむろに着ていた衣を脱ぎ捨てていく。足往は、目のやり場に困って反対を向いていた。

「さて足往、出かけるぞ。その白膠木ぬるでの依代をよこせ」

振り返ると、真新しい衣に着替えた聞こえ様が、杖を片手に淡碧たんぺきの勾玉まがたまの額飾りをつけて立っていた。頭には布を巻き、白髪がすっぽりと覆われていた。足往から依代を受け取ると、行くぞ、と老婆は戸口をくぐっていく。わけがわからぬままに足往も外へ出ると、「早くその背にわしを負わぬか」と老婆が急せかしてきた。

「オレがおば様を背負っていくのか？」

当たり前じゃ、ほれ早く、と杖で尻を叩いてくる老婆に抗しかねて、足往は渋々その背に聞こえ様を乗せ、揺すりあげた。すでに外は暗かったが、東の空にかかる満月が煌々と地面を照らしていた。

「行ってくるぞよ、火魚」

「おば様も足往も、どうか気をつけて」

月明かりのせいか、見送る火魚の顔が妙に青白い。気にかかったものの、「はよ行かぬか」と、太ももを老婆に蹴りあげられた足往は、やむなくそのまま出立したのだった。

山野辺のムラは、オグニの清流と大河が合流する砂州から、大河を遡つていく。東の空の月が中天に差しかかるころ、流れが大きく蛇行した山際の集落に足往たちはたどり着いた。

入口に火が焚かれた家の前に、さきほどの男が立っていた。誘われるままに、おばは様とともに足往も中へ足を踏み入れる。薄暗い家内に女のうめき声があがる。見れば火魚とそう年も違わぬ娘が、囲炉裏の脇で両腕を女たちに支えられながら、大きく背をのけ反らせて喘いでいる。産の場に立ち会うのは足往には、初めてのことだった。顔中に脂汗を浮かべ、獣の咆哮のような叫び声をあげる女の姿は恐ろしく、足往の総身が粟立つ。老婆は娘のそばに歩み寄ると、娘の脚の間に腰をおろした。

「おお、頭が見えてきておる。あと一息じゃ、それ、腹に力をいれぬか」

娘の足がこちらを向いてなくてよかつたと、足往は心底ほつとしながら、おばは様の手もとを見つめていた。その骨ばった両手には、白膠木の依代が捧げ持たれていた。聞こえ様は、依代を高く掲げると、目をとじて口中でなにかを小さく唱えはじめた。つづいて娘の身体のうちちに依代を当てては、目を閉じて唱えることをくり返していく。娘の叫び声は、絶え間なくあがりつづけていた。

「痛い、痛い、身体が絞られるように痛い！」

娘がようやく言葉を口にした。しかし次の瞬間、娘は大きく叫んでのけ反ると、がくりと首を落とし氣を失った。老婆は低く唸ると、依代を囲炉裏に投げ入れた。灰が舞い、勢いを増した炎が家内を赤く染め、芳香が広がる。聞こえ様は娘の腹に跨ると、きつく眼がとじられたままの頬を平手で張りはじめた。

「目を開けよっ！ ムラを護る靈魂が宿る赤子ぞ！ この世に降ろさずして土に還すか！」

ばん、ばんと、頬を打つ音がつづき、うめき声をあげた娘がうつすらと目を開ける。聞こえ様は娘の腹から脚の間へ滑りおりと、天へ向けて、合わせた両手を突きあげた。屋根に開けられた煙出しの穴からひとすじの月光が射し込み、聞こえ様の全身を照らした。

「あが心清く明し！ この娘が魂、清く明し！ いやや、みどり子をば現世に降ろさせたまえ！」

ムラ中に響きわたるほどの大音声で叫ぶと、聞こえ様は渾身の力を込めて娘の腹を押さえつけた。娘の絶叫があがった直後、高らかな産声が家内に満ちた。

「産まれたぞ！ 女の赤子じゃ」

朱に染まった赤子が、聞こえ様の手でとりあげられ、へその緒が切り落とされる。涙を流しながら娘は赤子を抱き、そっと頬ずりする。まだ目の開かぬ赤子が、何かを感じるのか、小さ

く首をかしげて泣き声をあげた。足往は、己の頬にも涙が伝っていることに気づき、あわてて腕で顔を拭う。その耳には、青白い光のなかで言上げことあされた聞こえ様の呪言まじないが、いつまでも響いていた。

夜が明けるまで、聞こえ様と足往は、山野辺のムラの者たちに歓待を受けた。やがて白々と刃りが明るくなつた頃、たくさんの干し肉や、衣を編むためのカラムシの糸束を土産に持たされて二人はムラを出立したのだつた。

蛇行する大河に沿つて、老婆を背負つた足往は歩く。川面を渡る風は爽やかで、草に降りた朝露が疲れた足裏に冷たく心地よい。西の空には輝きを失つた月が沈みかけ、東の山並みからは力強い朝陽がのぼろうとしていた。

「おば様、起きているか」

背中身じろぎをした老婆に、足往は声をかける。なんじゃ、と返つてきた応えに足往は言葉を継いだ。

「オグニの聞こえ様は、すごい力を持っているのだな。オレは心が震えた」

「わしの力ではないわい」

拗すねたような声音に、足往は首をひねる。おば様の力でなくて、何の力だと言うのだ。柄

にもなく照れているのかと笑う足往の頭が、老婆の拳で思いきり殴られた。

「痛いぞ、おば様」

抗議する足往の背から老婆はすべり降りた。

「わしが腕のよい祀部だから赤子を無事生まれさせたと、そなたは言うか」
怒りを込めた眼差しで見あげられ、足往はたじろいだ。

「わしはそこまで思いあがってはおらぬぞ！」

山の上に姿を現した朝陽の黄金色の輝きが、老婆の姿を照らした。その眩まばゆさに眼を細めながら、足往は聞こえ様が語る言葉に聞き入っていた。

森の木々や大河、山や海。水、火、風、土、あらゆる獣に草木たち。それらすべてに魂たまが宿る。その魂たちに優劣はなく、ひとしくこの世に生を受け、時がきたらこの世を去っていく。魂の循環めぐりは自然の理ことわり。その大きな理を我ら祀部は神と呼び、畏おそれ敬うやまい、この世にあるすべてに感謝して祀るのだと。

「足往よ。そなた、依代に何を込めておる」

語り終えた聞こえ様の問いに、足往は慎重に言葉を選ぶ。

「産や病が、よく癒いえるよう、祈りを込めてつくれと、父に教えられた」

「そうではない。わしが問うておるのは、そなたの依代は何を写し取っているかということじ

「や」

「それは……。おば様とおなじく、はら孕んだ女の形を模しているつもりだが」

「わしの依代は、女の形を模しているのではないぞ」

では何を、とたずねようとして、足往は聞こえ様の言葉を思い返す。自然の理。聞こえ様が畏れ敬うものとは。

「おば様が刻むものは、神、なのか——」

ふつと老婆がほほ笑んだ。その皺だらけの顔に一瞬、火魚の面差しが浮かんた。

「神の形をわしは知らぬ。この世のすべてに宿る神は、到底一つの形ではあらわせまい。だが、命をこの世に産み落とすはら孕み女を模すことは、あながち間違ひではなからうよ」

初めて依代をつくるとき、孕んだ女の形を模せと父に教えられた足往は、そのことに何の疑問を抱くことなく、ただ象かたどつてきたことを恥じた。

「オレの依代は、ただ人形ひとがたに捏ねられただけの土塊つちくれだったのだな」

足元を見つめてつぶやく足往の言葉にうなずきながら、

「まあ、そう急せくな。そうした眼でモノを見られるようになったのだ。これからゆつくり自然を見渡して声を聴き、そなたの感じたモノを写し取つたらよい」

さ、もう一度その背に負うてくれよ、と老婆は片手で腰をさすりながら足往を見あげて笑つ

た。

やがて二人は、オグニの流れが大河にそそぐ砂州までたどり着いた。ムラまではあと一息。再び老婆を背に負ったときからずっと、口に出すかどうか迷い続けていた足往は、思い切つておばば様にたずねてみることにした。

「なあ、おばば様。オレは火魚に妻問いしたいと言つたんだが、断られた」

なんとまあ手の早い男か、と老婆が肩越しにおおげさなため息をついてみせる。

「ひと目見て、この女しかいないと思つたのだ。火魚もオレのことを気にかけてくれている様子だつたし……。けれど、誰とも婚姻わぬ、子も産まぬと拒まれて。それ以来、火魚は口も利いてくれぬのだ」

言いながら、だんだんみじめになつてきた足往は大きく息を吐いた。その歩みが一気に重たくなつていく。

「あれの母親は——、火魚が生まれて五つめの春に死んだのだ」

足往の背で、老婆がぼつりぼつりと話しはじめた。

火魚の母、わしのただ一人の娘は、そのとき孕んでおつた。産が近づき、懸命に呪言を言上げするわしの横で、火魚も必死で手を合わせておつたよ。だが、子は逆子でな。足は見えていながら、それ以上、一向に降りて来る気配がないまま時だけが経つてしまつてのう。その間の

わが娘の苦しみようは、今朝の山野辺の娘とは比べものならぬほどでな……。

足往は、さきほど目にした娘の、手負いの獣のような姿を思い出し、それ以上の苦しみに悶もだえる火魚の母を思つて身震いした。

「結局、娘も赤子も助からなんだ。けれども火魚は、氣丈に振る舞つておつたよ」

おば様とともに弔いを済ませた火魚は、その間、一度も涙を見せなかつた。

しかし、火魚の父は平静ではいられなかつた。妻を亡くしてから、食事も摂らず眠ることも忘れ呆けたように過むくろごしていたある日。姿を消した父は、森の奥で獣に身体を食いちぎられた骸となつて見つかつた。

「周りがうらやむほど仲の良い夫婦でな。後を追つたのだろうと、みなが噂したものだつた」

その時から、火魚は人前で声をあげて笑わなくなつた。年頃を迎え、美しい娘に育つた火魚には、ムラの外からも男たちが次々と妻問いに訪れたが、火魚はそれに応えることなく、おば様のもと、自然の声を聴きながらひっそりと過むくろごしている――。

「火魚は、産が恐ろしいのだな」

母はらからと同僚とも、そして父までも奪つてしまつた産を怖がるのも無理はない。足往は、火魚が子を産まぬと言つたときの青ざめた顔を思い浮かべ、深い吐息をついた。

「所詮しよせん、聞こえの力も役には立たぬということよ」

自嘲気味につぶやく老婆に、足往は「それでも、おば様は山野辺の娘の産を無事に為したではないか」励ますように言つて、背中の小さな身体を揺すりあげた。

「だからそれはわしの力ではないと申しておる」

即座に後ろから頭をはたかれて、足往は苦笑する。

「産まれるか、ならぬかは、神が決めていること。どれほど祀部が祈ろうとて、定めは変えられぬ。病とおなじよ。わしはただ、病に効く草を知り処方するだけ。助かるべき者は助かり、そうでない者は命を落とす。それだけじゃ」

では、聞こえ様の役割とはなんなのだ。

思わず問うた足往に、老婆はふん、と鼻で笑いながら応えた。

「気休めよ」

思いもよらぬ言葉に、足往の足が止まる。おば様はつづけた。

打ち身をした者には接骨木の葉を煮て汁を塗る。病で消耗した者には木天蓼を。そうした知恵は、自然の声を注意深く聴いていけば、誰しも身につけられるもの。とはいえ、人は日々の暮らしのために獣や魚を獲り、木の実や山菜を集めねばならぬ。ゆつくり自然に親しむことなど出来はしない。それゆえ、祀部としてのみ生きる者が必要とされるのだ。

「土部も、祀部とおなじであらうな」

自在に形が変わる土を握ね、火の力で堅固な器を創りあげる土部。それは技術を知らぬ人々にとつては、神の技をなす者として崇めるべきもの。土の見分け、風のあて方、火の加減。それらは注意深くそこに従事して初めて体得できるものであるからこそ、人々は「土部」を特別に扱い、その技を使うことに専念させる。

「われら祀部も、ムラの仕事を免ぜられるかわりに、日々森へ入り、木々や獣の声を聴き、川で水を浴び、風を感じて空を見あげる。そうして気づくことを、人々へ伝えるのがその役目」だから人の命を生まれさせ、死にゆく命を救うことなどわしにはできぬ。おば様は言い切った。そして、「気休めというのはな」と、言ったあと、しばらく間をおいてつづけた。「どうにもならぬことを知っている人々が、それでも何かに縋らずにはおられぬ、その思いを受け止めるということじゃ」

娘の産を氣遣つて、オグニに駆けつけた男の顔が足往の頭に浮かんだ。産は娘が為すこと。それでも何かせずにはいられなかつた父の姿。夜の闇のなか、ひたすらに駆けて、遠くオグニまで聞こえ様を迎えにきたその思いに、おば様は応えたのか。

オレは、オグニの土部として、ムラの人々のため、火魚のために何ができるのだろうか。おば様の言葉に、足往は考え込んでしまった。老婆はその背中で沈黙を守っていたが、やがて妙なことを言いだした。

「ま、わしにも一つだけ、妙な力が備わっているのだがな」

妙な力？ と問う足往に、

「夢見ゆめみの力よ」

と老婆は応える。現実まことになることを、夢に見る。火魚の母が命を落とすときも、わしは夢でそれを知っておったのよ。子が逆子で、母子ともに助からぬことをな。淋きびしさの滲じむ声でそう言うてから、おばは様はふいに思い出したように、

「おまえがオグニに来ることも、わしは夢で見知っていたのだぞ」

と足往の耳元に囁いた。くすぐったさに顔を振りながら、足往は「では、これからオレはどうなるのだ。火魚とのことは」とたずねてみた。

「教えてやらん」

老婆は天を仰ぎ大きな声でそう言うて、足往の太ももを蹴りあげ、「ほれ、オグニはすぐそこじゃ、早う歩け。着いたら起こせよ」と急かすと、背中で躰いびきをかきはじめた。

どこまで信じていいのやら。足往は苦笑しながらつぶやくと、砂州を渡り、オグニの清流をムラへ向けてたどりはじめたのだった。

満ちていた月が細り、天から姿を隠すまでの日数が経つ間、足往は、いく度となく土を握ね

ては依代をつくつてみた。しかし、心にかなうものは出来上がらない。そして相変わらず火魚は口を利いてくれないままだった。そうして、野焼きの日がやってきた。その日は朝から涼しい風が吹き、空には羽毛のようなすじ雲が浮かび、早い秋の訪れを感じさせていた。

広場の中央に丸く積みあげた薪の周りに、千熊たちが土器を並べていく。土器のすき間に、足往が細く割った薪を差し込んでいく。さらにその間に木くずを押し込んでから火種を移すと、火は瞬く間に燃え広がり薪を赤く焼きあげていく。

「器は焼け焦げてしまわないのか」

あまりに強い炎の勢いに、千熊が心配そうにたずねてくる。

「大丈夫だ。黒い煤すすは、さらに焼き締めていくにつれ、赤く変化していく。それが、器が強くて丈夫になった証だ」

自信に満ちた足往の言葉にうなずくと、千熊は薪割りに戻っていった。その背を見送りながら、足往は結局、依代を焼くことができなかつたことを思っていた。いまさら依代ができたところで、どうすれば火魚が自分に振り向いてくれるかもわからない。燃え盛る炎を見つめながら、足往はどうにかして火魚と言葉だけでも交わせるようになりたいと唇を噛んだ。

野焼きから三日目、幾度も向きを変えながら熾火おきびで焼き締め、風にあてながらゆつくりと冷ました土器が、灰の中から取り出される。

「よし、割れもない。音もいい。さすがはオグニの土だ、いいものが焼けたぞ」

次々と器を手にとり、その表面を叩いたり撫でたりしながら、足往は完成した鍋や甕をムラの人々に渡していく。土捏ねから携わっただけに、みな、感慨深げに器を眺めている。そんな人々をよそに、灰をかき集める振りをしながら、足往が地面から何かを拾いあげているのを千熊は見逃さなかった。

「なんだあ？ 足往、それは」

すつと近づいて、背後から足往の手のひらをのぞき込む。あわてて握りしめたその拳を、千熊が無理やりこじ開ける。あらわれたのは、美しい紋様が彫りこまれたいくつもの黒い小片。どれも糸を通すための小さな穴があげられている。

「ははあ、腕飾りか」

にやりと千熊が笑う。黙っていてくれよ、と足往はその手に小片を包みながら口をとがらせる。なるほど、モノで気を引こうというわけか、と言いながら、

「次の満月には、豊穰を祈る祀りが行われる。そのときに渡せるといいなあ」

からかうように目くばせして、「そうそう、祀りの夜は想う女に言い寄るいい機会だと、おまえも知っているな？」と問うてきた。想う女ができたなら、まず己の名を告げ、相手にも名を告げる。そのうえで妻問いたいと申し入れ、それを女が承諾して初めて男は女に触れるこ

とが許される。女の許しがないまま無理を強い男は罰を受け、ムラから出ていかねばならぬ。しかし、祀りの夜だけは特別だった。愛しい女がつかない場合、男はその夜に限って女に強引に迫ることが許される。そして、一度肌を許せば、大抵の女はすんなり妻問いを受けてくれるものだと、足往は兄たちに聞かされたことがあった。そうは言っても、男の強引さを受けられる下地が女にあつてのことだけれど、とも兄は付け加えていた気がする。火魚はどうだろうか。オレにそんな機会を与えてくれるだろうか。足往は、そつと手を開いて腕飾りにするべく焼きあげた小片につぶやいてみるのだった。

満月の祀りの夜が訪れた。

ムラの広場の中央には、炎が盛大にあがつていた。爆ぜる火の粉の下を、子供たちが歓声をあげて走りまわっている。焚き木の周囲に据えられた台の上には、焼かれた肉や魚、煮炊きされた芋のほか、木の実の粉を練つてさまざまに味をつけた餅などがうず高く積まれている。醸された酒が振る舞われ、祀りの祝詞を終えた聞こえ様を中心に、酒盛りが始まつていた。聞こえ様の両脇に腰をおろした足往と火魚は、互いに一度も目を見合わすこともなく、運ばれてくるモノをつまみ、ちびちびと酒を舐めていた。足往の腰に提げた袋には、渡せず仕舞いの腕輪がひっそり収められていた。やがて手拍子とともに妻鹿がいい声で謡をはじめ、それに合わせ

て女たちが手を振り腰を振り、踊りの輪ができていく。ぼんやりとその様を目で追っていた足往の視界が、ふいに塞ふさがれた。千熊だった。

「さあ、おまえたちも踊れ踊れ」

足往の腕と火魚の腕を同時に掴んだ千熊が、「聞こえ様、二人をお借りします」とおぼば様に頭をさげる。「おお、まかせたぞ」と前歯の欠けた口を大きく開けて、老婆は盛大に笑った。腕を引つ張られた足往と火魚は、たたらを踏んで踊りの輪へ飛びこむ形になった。火魚は覚悟を決めたのか、すつと背筋を伸ばすと、白い腕を翻ひるがえしながら妻鹿の謡に乗せて歩を進めていく。その後ろを、見よう見まねで足往が手を振りながらついていく。焚き火の反対側に回ったとき、背中を強い力で押された二人は踊りの輪からはじぎだされていた。

「そのまま朝まで戻ってくるんじゃないぞ」

踊りの輪のなかで歌う妻鹿の腰をうしろから抱きしめながら、千熊が足往に向かって叫ぶ。

足往は頭をさげると、火魚の腕を掴み、広場を下る坂を駆けだしていった。

「足往、待つて。どこへ行くの」

火魚の言葉に返事をせず、腕を掴む力もゆるめぬままに、足往は走りつづける。オグニの清流の水音がほど近くなったところで、足往はようやく足を止めた。

「腕を離して、足往」

振り向くと、火魚が荒い息をしながらこちらを見つめていた。その瞳に、青白い月が映っていた。「離さない。離せばおまえは鮎のように、オレの手をすり抜けていつてしまふだろう」足往は、火魚を抱き寄せた。やわらかな胸が、くびれた細い腰が、足往の逞しい腕のなかで小さくもがいていた。その身体から立ちのぼる艶めかしい女の匂いを、足往は鼻腔いっぱいに吸い込む。「おまえが愛しい、火魚。おまえはどうだ、オレが厭わしいか？」耳元に囁かれた火魚が、顔を背けようと首をのけ反らせる。月光を浴びた白い喉に、たまらず足往は唇を落とす。ああ、と吐息を洩らした火魚の唇に足往の唇が重なる。くり返される口づけに、火魚の身体から強張り^{こわば}がほどけていく。その背をやさしく抱きながら、足往は川岸の篠群^{ささむら}にゆつくり身体を沈めていった。

「痛みはないか？」

半身を起して、足往は横たわる火魚の顔をのぞき込む。いいえ、と小さく首を振って火魚がほほ笑む。その眦^{まなじり}には、銀の糸のような涙の跡が残っていた。足往に組み敷かれ、火のように激しく燃える身体が、若鮎のように腕のなかで幾度も跳ねる。その様が愛おしく、我を忘れて足往は思いの丈を火魚にぶつけた。涙の跡に唇を這わせながら、足往は解けてしまった火魚の豊かな黒髪に指をすべらせる。

「ずっと、こうしたかった。ひと目おまえを見たときから、そう思っていた」

足往の言葉に、火魚は目を閉じてうなづく。わたしも。やわらかな声音でそう告げられて、足往は身のうちにふたたび熱い塊が沸き上がるのを感じていた。

「そうだ、これを」

足往は、脱ぎ捨てた衣のなかから腰に提げていた袋を探り出し、中から腕輪を取り出した。「おまえにつけて欲しくて作った。受け取ってくれるか」

火魚は緻密な紋様が刻まれた小片が連ねられた腕輪を、月光にかざして見入っていた。

「うれしい、足往」

腕輪をまとっただけの火魚の裸身に、足往はもう一度身体を重ねあわせる。二人の熱く甘やかな息遣いがオグニのせせらぎと溶け合い、祀りの夜は更けていった。

翌朝。

おぼげ様に顔を合わせるのが気まずい足往は家にもどらず、広場で土捏ねをはじめた。まだ暗いうちに家へ戻っていた火魚は一眠りできただろうか。火魚を思っただけで笑みがこぼれそうになっている自分がおかしかった。そんな足往を見つけた千熊が駆け寄ってくる。

「なんだ足往、その締まりのない顔は。さては、うまくいったということだな？」

髪を大きな手でぐしゃぐしゃにされながら、千熊のおかげだと、はにかみながら足往は頭をさげる。よしよし、これで聞こえ様も一安心。あとは火魚が元気な赤子を産んでくれれば文句なしだと言つて、千熊はムラの男たちと笑い合いながら森へ入つていった。赤子か、とつぶやいた足往が腕を組むのと、正面の家からおば様と火魚が出てくるのが同時だつた。

おば様は、広場を見渡して足往の姿をみとめると、じろりと鋭い一瞥をくれて森へ向かつて歩きだした。火魚は顔を伏せたまま、後につづいていく。一瞬見えた火魚の横顔は、瞼が赤く腫れていたようにも思えたが、二人についていけない足往は、胸騒ぎを抱きながら土捏ねの作業に戻つたのだつた。

その夜の夕餉の間中、おば様の眉間にはずっと深いたて皺が刻まれていた。火魚も、眉根を寄せたまま、時折ため息をもらしている。二人ともに足往のほうを見ようとはしない。いったい二人に何があつたのか。思いあぐねる足往をよそに、おば様はさつさと熊皮に横たわると寝息を立てはじめた。火魚も、足往に背を向けておば様の隣に横たわる。取り付く島もない二人の様子に、小さくため息をついて足往も鹿皮に身を丸めたのだつた。

翌朝、おば様と火魚は夜明け前から家を出ていった。声をかける隙すらないまま、ひとり取り残された足往は、広場で土器づくりに精をだした。

日が傾き、吹きわたる風に冷たさを感じるころ、おば様と火魚がムラへ戻つてきた。広場

を囲む家々の煙出しの穴から煮炊きの煙が立ちのぼるなか、火魚は各戸をまわり、人々に広場へ集まるよう声をかけていく。おばば様は、じつと目を閉じて広場の中央に立ち尽くしている。みなに何を告げようとしているのかわからぬままの足往は、火魚との仲が割かれねばよいがと、それだけを念じていた。

「これからわしが申すこと、よく耳を傾けて、そのうえでみなを考えを聞かせてもらいたい」
集まった人々にそう前置きをして、老婆は語り始めた。

「先の祀りの夜、わしは夢見ゆめみを得た。不思議な夢じゃ。このムラに冬がきて、雪が積もる。当たり前だと思ふなよ。わしらの知る雪景色は、せいぜいこの辺りまでの雪深さであろう」
そう言って、老婆は杖で自分の踝くるぶしを軽く叩いてから、その杖を高く振りあげる。

「わしの夢見では、雪は家々の屋根を覆おい隠かくしてしまふほどの高さまで積もっておった」
聞こえ様の杖は、広場を囲む家の屋根より上を指していた。

「いくらなんでも、それほど雪は積もらぬだろうよ、聞こえ様」

人の輪の中からおおずとおおずと千熊が進みでて、そう言った。これまでそんな大雪が降ったことなど周囲のムラでさえ聞いたことはない、と続ける千熊に、聞こえ様は大きくうなずいた。

「そうであろうな。わしとてこれまで生きてきて、一度もそんな大雪は見たことがない」
だがな、と老婆は言葉切った。わしが幼い時分に、おばば様から聞いた話がある。そのお

ばば様は、そのまたおばば様から聞いたという話じゃ。気が遠くなるほどの昔の話、として聞こえ様が語つたのは、このオグニ一帯の、今とはまったく異なる土地の有様だつた。

遠い遠い昔、この辺りは一年のうちのひとつを雪と氷に閉ざされ、森の木々には実をなすものが少なく、人々は食べるものを求めて転々と居を移して暮らしていたのだという。いつのころからか雪は少なくなり、森の様子も変わり、たくさんの実を落とす木々が増え、下草も豊かになり、川には魚があふれるようになったのだと。だが大河の水かさは今よりもっと多かつたために、雨が降るたびに川水はあたりの集落を押し流し、人々はすこしずつ大河を離れた地に移り住むようになったという。そしていま、我らはこのオグニにこうしてムラを構えて暮しておる。それはこの婆のおばば様の代からのこと。そこまで言うと、聞こえ様はムラのみなに向かつて問うた。

「はるか長い時の間に起きた自然の大きな移り変わりが、いまこのときに起きぬと誰が言える？」

ムラの人々は、無言で互いを見交わしていた。その目にはまだ、聞こえ様の言葉にどう返していいのかとそれぞれが迷いを浮かべていた。

「この冬に大雪がこの地を見舞うという夢見を、ありえぬことと笑えぬのには理由がある」
おばば様は、森を指さした。この秋、木の実は常の年よりもたわわに実っているのではない

か？ 人々が小さくうなづくのを見て、おばば様はつづけた。

「この秋、拝み虫の卵を見た者はおらぬか？」

これには妻鹿の子供が即座に応えた。いつもの年よりもいぶん高い場所に産みつけてあって父ちゃんに取ってもらったと。獣の姿はどうじゃ、と重ねて老婆は問う。

「そういえばいつもの年より、今年はイノシシも野兎も姿を見かけぬ」千熊が応えた。

風の声、雲の流れを見ても、常の年とは違う気配をわしは感じるのよ、と聞こえ様は言い、最後に視線を火魚に移してうなずいた。火魚は聞こえ様の隣に進みでて、みなに語りはじめた。

「おばば様とおなじ夜、私も夢見を得ている」

火魚のその姿に、ムラの人々が居ずまいを正していく。どうやら火魚がみなの前でなにかを告げるのは初めてのことらしかった。聞こえ様の血をひく娘が告げようとする言葉に、みなが真剣に耳を傾けようとしていた。低くやわらかな不思議な響きの声音が、言の葉を紡いでいく。

「私の夢見も、おばば様とおなじ、すさまじい大雪の景色だった」

まだ聞こえの者としては未熟だけれど、と断つてから、火魚はつづけた。昨日、今日とおばば様とともにつぶさにオグニを歩いてまわり、木々の声、水の流れに常とは違う気配を感じていることを語った火魚は、人々を見まわして言った。どうか、この夢見を嗤わずに備えをしてほしい。ひとりでも命を落とすことのないように。最後の一言を告げるとき、火魚が足往をひ

たと見つめた。ふいに視線が合った足往の胸が、ざわりと騒ぐ。しかし火魚は、その視線をすぐに逸らし、うつむいてしまった。

「備えとは、どのようにすればよいのか、教えてくれ聞こえ様」

千熊の言葉に、老婆と火魚は顔を見合わせてうなずきあつた。

「まずは、女と子供は常の年よりも多くの食料を集めて保存することじゃ。木の実も芋も、できる限り集めて土中深くに埋めておくことよい。キノコや山菜はよく干しておけ」

「男たちは、広場に大きな家を建てるのじゃ。みなが一つ家に集まって暖をとれるように、大きな柱を立て交わし、丈夫な屋根を葺くように。それから薪をたくさんに準備じゃ」

これから獲れる獣や魚の肉は塩漬けと干し肉に、と次々と聞こえ様が指図し、人々が役割を確かめ合う様子に、オレにできることは何だろうかと、足往は考え込んでいた。

「足往よ」

突然名を呼ばれ、足往は顔をあげた。あわてておば様が手招きする傍へそば駆け寄っていく。

「そなた、わしの言葉を、ほかのムラの者たちに伝えてまわってはくれぬか」

予想だにできなかったおば様の言葉に、一瞬足往はたじろいだ。しかし、火魚の夢見たことが現実になるのなら、一人でも多くの命をそこなわぬよう、すぐにでもオグニを発たち多くのムラを訪ねてまわらねばならないと足往はうなずいた。

「わかった。今夜にでも出立しよう」

逸る足往に、出立は明日でよい、今宵はゆっくり夕餉をとって身体を休めておけと笑いかけ、老婆は「足往のために美味いものをこしらえてやれよ」と火魚に家へ戻るよう促した。ムラの人々へも、明日からの段取りが決まったら今宵は家へ帰るようと言い置いて、おばは足往とともに広場を後にしたのだった。

その夜、足往は火魚にかいがいしく世話を焼かれながら、おばは様とともに夕餉を食べ終えた。いつもならすぐに熊皮に横になるはずのおばは様が、杖について立ちあがる。

「どこへ行くのだ、おばは様」

「星見じゃ。邪魔をするなよ、二人とも」

後ろ手に杖を振りながら戸口を出ていくその姿を、足往は追おうとした。秋も深まりはじめた夜、外にいては身体を冷やしてしまう。火魚と二人きりにといい気遣いはうれしいが、おばは様に寒い思いはさせられぬ。立ちあがった足往の膝に、火魚の腕がからまる。

「足往。おばは様は、今宵は千熊のところで夜を過ごすと言っていた」

見あげる火魚の紅い唇が艶めかしかった。足往は、火魚の手を取り抱き寄せる。二人は唇を重ね、互いの背に腕をまわし固く抱き合う。衣を脱いだ火魚の背中に、囲炉裏の火影が揺らめ

いていた。すつと伸びた背筋が、くびれた腰から尻にかけて見せる反り。その美しい曲線と、その下に突きだす豊かな丸みを帯びた尻の形に足往は見惚れた。

「きれいだ、火魚」

大きな手の平で、その背を上から下へゆつくり撫でおろしていく。ひんやりと滑らかな手触りの肌の奥には、滾る熱がひそんでいることを足往は知っている。後ろから火魚を抱きしめ、首筋から肩、背中へと唇をすべらせていく――。

「火魚はよく夢を見るのか」

横たわる足往の胸に、目をとじて頬を寄せる火魚の髪がうねるようにひろがっている。つやつやとした湿り気を帯びた髪の中に指をからませながら、足往はたずねた。

「先見さきみのような夢を見たのは祀りの夜が初めて」

足往と別れて家に戻り、夜明けまでのほんのひととき横になった折に夢見を得たのだという。大雪が融け、埋もれていた家々に足を踏み入れると、折り重なるようにして事切こときれている夫婦と子供の姿が。そうつぶやくと、火魚はきつく眼をとじ小さく身震いをした。大丈夫だ、そんなことにならぬようオレがみなに備えを呼びかけて歩く。肩を抱く足往の言葉に、火魚は何度もうなずく。

「本当は、足往と共寝ともねをしたせいでそんな夢を見てしまったのかと思つた」

火魚は足往の逞しい胸に指を這はわせながらつぶやいた。オレのせいなのか？ 思わず身体を起こそうとする足往を、火魚はやわらかく押し戻してその胸にふたたび頬を寄せる。

「母が死ぬ様をみて、父の狂っていく様をみて、私はだれとも婚姻わぬと決めていた。子を産むことも恐ろしかったけれど、愛する者を亡くして、己も生きていられなくなるほどの思いが恐かつた。失つては生きていけなくなるような相手など、私にはいらぬと思つていた」

ゆつくり半身を起こした火魚が足往の顔を見おろす。射るような眼差しだった。

「足往。私はいまなら父の思いがわかる。愛しいおまえを失つては生きていけない」

火魚の滾たぎるような口づけが足往に落とされる。ふたたび熱を分け合つた二人は深い眠りに沈んでいった。

夜明け前、足往は女のすすり泣く声に目を覚ました。

「火魚……？」

名を呼ばれ、囲炉裏のそばにうずくまっていた火魚が顔をあげる。その瞳からは涙があふれていた。どうした、と近寄る足往の胸に、火魚が飛びこんでくる。

「夢見が。足往、おまえが血に染まって倒れている夢見が」

そう言ったきり、火魚は泣きじゃくり言葉がつづかない。

「なにごとか、足往」

振り向くと、戸口からおば様顔顔をのぞかせていた。

「おば様、火魚が夢見を得たと。オレが血に染まって倒れていたと」

ふむ、と囲炉裏の前に腰をおろしながら、眉間に皺を寄せた老婆は言った。

「火魚よ。夢の様子をよく聞かせてくれ」

足往からゆつくり身体を離すと、火魚はおば様に向き直った。

「足往は旅の途中と見えました。腹から血を流して……倒れていた近くに川の流れが見えました」

……あれは、オグニの流れが大河に注ぐ砂州？ つぶやいたきり、火魚は黙り込んでしまつた。おば様も目を閉じて何かに思いを巡らせているのか、びくりとも動かない。足往は腹をさすりながら、そうしてオレは命が助かるのかと尋ねてみたい気持ちを抑え込んだ。なるようにしかならぬ。生かしてもらえる命ならば、オレはまたオグニに戻ってこれるだろう。そうでないなら、それまでのこと。足往は己にそう言い聞かせて、つとめて明るく声をだした。

「おば様、火魚。大丈夫だ、オレは必ずここに戻ってくる。信じて待っていてくれ」

火魚はうなずくと、涙を拭^{ぬぐ}って足往の出立の用意を整えはじめた。いつ織り上げたのか、新

しい衣と、日持ちのする木の実の焼餅などがぎっしり詰められた皮袋を足往の前に並べていく。「足往よ、二つめの満月までには戻ってくるのだぞ。それを過ぎればおそらくこの辺りは雪に閉ざされようからな」

衣を着替えながら、足往はうなずいた。長い旅になるが、足が往ける限りのムラまで備えを呼びかけてまわらねば。足往はきつく腰帯を締めた。

「それから、足往」

よく聞けよ、と老婆は念をおした。

「大雪のこと、オグ二の聞こえの夢見と申うても、信じぬものもあるやもしれぬ。そなたは備えをせよと伝えたら、人々がそれをどう受け止めようとも構わずに、すぐ次の土地へ行け」
わかつたど力強く応えて、足往は戸口を出ていく。

広場には、女と子供たちが朝採りの山菜や茸きのこを板の上にならべている。男たちは、大雪を凌しのぐ家を建てるため、広場の西に大きな穴を掘りはじめていた。その男たちの輪から、千熊が抜け出してきた。

「これから発つか。気をつけて行くのだぞ」

まるで父や兄のように気にかけてくれる千熊に、足往は深く頭をさげた。いつかムラの人々も足往の周りに集まっていた。無事に戻ってこいと口々に送られながら、足往は広場を抜け、

オグニを旅立ったのだった。

大河のほとりまで下った足往は、河を遡り南を目指す。まず山野辺のムラを訪れると、産をたすけた家の者たちが中心となり足往を歓待してくれた。聞こえ様の大雪の夢見を告げると、そんなことがあるのかと口にしながらも、「備えをしておくにこしたことはない」と、ムラの者たちは早速手当てを始めた。その様子を見て、足往は次のムラを目指して出立する。

いくつものムラをめぐり、足往は人々に大雪への備えを説いていく。どこのムラにもオグニの聞こえ様の名は届いていたようで、おおむねどこでも足往の話に人々はうなずきながら耳を傾けてくれた。備えかたはムラによりさまざまでも、起こりうるかもしれないという心構えをしておくことは無駄にはならないはずだと、足往は思うようになっていた。

おぼば様からオグニに戻る期限と言われた二つ目の満月が近くなつたころ、足往は生まれ育つた海辺のムラを訪れていた。なつかしい父と母、兄たちに再会し、たがいの無事をよろこびあつた。依代をつくつているのかと父に問われた足往は、神の形をどうあらわしてよいのかわからず、よいものが出来ないと思えた。父は笑つてこう言つた。

「神はすべてに宿っているのだから、なにを模してもそれは神の姿になるだろう。どんな形かを迷うのではなく、おまえが胸をつよく揺さぶられるものを形にすればよいのだ」

つよく胸を揺さぶるもの。足往のまぶたには、火魚の面影が浮かんでいた。愛しい娘がいるのだと父に告げると、男の顔になつてゐるからそんなことだろうと思つていたと笑われた。大雪には、集落のみなとしつかり備えると約してくれた父たちに別れを告げ、足往はオグ二を指した。

海辺のムラから大河に沿つて歩いて二日が過ぎた。さすがにこれまでの長い旅路は若い足往にもひどい疲れをもたらしている。あと一日歩けばオグ二の流れにぶつかるとは。足を引きずるようになつて歩いてゐるうち、足往はあたりの景色が変わつてゐることに気がついた。初めてオグ二を指して通つたときは、陽射しがまぶしい夏。もうすぐ雪が降る今とは様子が違つてゐるのも無理はないと思おうとして、足往は川沿いの木々が切り倒された土地に新しいムラが拓ひらかれてゐるのを見つけたのだつた。ここにも大雪のことを伝えなければと、足往は痛む腿ももを叩きながらムラに近づいていった。

屋根に葺いた萱が真新しい。木々の切り株もまだ強い香りを漂わせてゐる。四戸の家しかない。いちいさな集落だつた。足往に気づいたのか、一人の男がこちらへ向かつてくる。目つきの悪い男だつた。鳥の巣のような蓬ほうほう髪と長い髭ひげの男は、年のころもさだかではない。

「何をしにきた」

咎とがめるような口調に怯ひるみながらも、足往は大雪の夢見のことを伝えた。信じられないかもし

れないが、備えだけはしておいたほうがいい。黙って聞いていた男は、

「そんな禍言まがことを触れまわっているのか、おまえは」

と、蛇のような眼で足往を見おろした。近づいてみると、かなりの大男だった。ふいに風が二人の間を吹き抜け、男の前髪の間から額に刻まれた刺青がのぞいた。

(咎人とがひとのしるしか)

足往は、禍言ととるかどうかはおまえの勝手だが、備えをしておくに越したことはないと言げ、逃げるようにムラを出た。しばらく行つて振り向くと、男は別の男と何かを話しながら足往のほうをじつと見つめていた。

オグ二への道を急ぐ足往は焦っていた。誰かが尾けてきている。さきほどのムラの男に違いなかった。駆けだして振り切ろうかとも考えたが、もうそんな力は残っていないとあきらめる日は沈み、暗くなつた辺りを、東の空にかかる月が照らしていた。身体を休めることはあきらめて、足往は夜通し歩きつづける。月が中天にさしかかるころ、ようやくオグ二の清流と大河が接する砂州にたどりついた。あとすこしだ、そう思った足往の腰に鈍い痛みが走る。ぶつかつてきた男が、河原に倒れた足往を見おろしていた。

「禍言を口にした罰だ」

男は言い捨てて、来た方角へと走り去っていった。足往は、腰をさすった。手のひらが粘り

を帯びた血で染まっている。もう、起きあがる力はなかった。見あげた月に、火魚の面影が重なる。目を閉じた足往の頬を、涙が伝った――。

その年の冬は、夢見のとおり、すさまじい大雪となった。家がすっぽり埋まり、いつまでも止まぬ吹雪のなかで、足往の言葉を聞いた集落の人々は身を寄せ合い、食料を分かち合つてなるとか命をつないだ。遅い春がこの一帯に訪れたとき、大河の流域のムラの人々は、みな生き延びた喜びをかみしめていた。たった一つ、オグ二にほど近い小さな集落だけは、火魚が見た夢見のままに滅んでしまっていたけれど。

オグ二のムラに、初夏の風が吹きわたる。青々と葉を繁らせた木々の梢こずえが揺れ、若芽の香りがあたりに満ちる。広場では子供たちが大人とともに、土を握にぎねている。が、どの顔もどこか落ち着きがない。心ここにあらずといった風情ふぜいできよろきよろと辺りを見回しているのだった。広場の正面の家内では、囲炉裏にかけられた鍋に湯がたぎり、女たちが息を詰めて聞こえ様の背中を見守っていた。

「火魚、水が出たからの。これからいよいよ産が始まるぞ」
大きく開かれた脚の間で、おば様火魚を励ます。編布を口に噛みしめ、足往が贈った腕

輪を握りしめた火魚が、しつかりとうなずく。

「それにしても足往のやつめ。依代は自分が用意すると言って、まだ出来上がらぬのか」

こんなことなら、わしが彫っておくのだったと言いつ終わらぬうちに、戸口から足往が飛びこんできた。

「おば様、できたぞっ！ 見てくれ」

足往が胸に抱えていた布を開くと、赤く艶やかな依代が姿をあらわした。

「なんとこれは。このように大きなものは初めて見たぞ」

赤子ほどの大きさの依代を両手で捧げもち、おば様はその胴体をながめまわしている。背から尻にかけての見事な曲線をまとったそれは、若鮎のようにほっそりとしていながら、尻のふくらみは豊かに、乳房と腹はすつきりと無駄なく象られている。その腰から足には微細な紋様が刻まれているにもかかわらず、その頭部は丸い球の形を模しているだけだった。

「足往、なぜ顔を刻んでおらぬ？」

老婆は、足往にたずねた。

「神はすべてに宿るとおば様も父も言った。ならば見る者の数だけ、その心のありようで顔はどのようにも浮かぶと思ったのだ。だからオレはそこになにも刻まなかつた」

それに、と足往はつづけた。

「この依代には、大きな思いを込めている。ひとり火魚のためだけのモノではない。オレはこのオグニの人々、出逢ったムラの人々、みなのためを祈ってこれをつくったのだ」

すさまじい大雪の前に、人は為す術もない。それでも身を寄せ合い、食料を分かち合い、人々はそのなかを生き延びる。きつとこれから先も、人の力およびぬ大きな自然のうねりは人々を襲うだろう。それでも人は、けなげにこの地で生きていくのだ。その人々が、すこしでも心おだやかに、争わず手を取り合つて過ごせるように。

「大きな祈りを込めようとしたら、大きな依代になってしまったのだ」

照れくさそうに、足往は頭をかいた。依代を抱いたままのおば様が、はな涙をすすった。

「泣いているのか、おば様」

不思議なものを見るように目を見ひらく足往の頭に、うるさいわい、とおば様の杖が振られる。

「痛いぞ、おば様」

口をとがらせる足往に、火魚のしのび笑いがもれる。

「足往。愛しいおまえに、産で叫びのたうつ姿は見られたくない。外で待っていて」

うなずいた足往は、おば様から依代を受け取ると、火魚のそばにそと立たせた。指先で依代の滑らかな肌を撫でる火魚に顔を寄せ、足往はその額に口づけを落とす。そして「おばばなめ

様、火魚をたのむ」と頭をさげ、立ち上がった。

広場に姿をみせた足往を、待ち構えていたムラの男や子供たちが取り囲む。

「どうだ、産の様子は」

千熊の心配そうな顔に、足往は「大丈夫だ」と笑ってみせた。

あの夜。傷を負って川辺に倒れた足往は、火魚の頼みで見回りをしていたムラの男たちに助けられ、命をとりとめていた。深い眠りから覚めた足往は、火魚が身ごもっていることを告げられたのだ。大雪に閉ざされた長い冬。その極寒のなか、オグニの人々は一つ家に身を寄せ、互いに支え合いながら、新しい夫婦の誕生を心から言祝ことばいでくれた。そしていま、火魚が無事に産をおえることを、みなで願ってくれている。

このムラで火魚と、みなとともに生きる。土部として、オグニの男として。

吹きわたる風に清流の匂いを感じた足往は、空を見あげた。突き抜けるような青空に鳥が舞っている。その鳥を追いかけるように、高らかな産声が天にこだました。

(了)